

## 妙傳寺 半跏思惟像（伝如意輪観音菩薩）解説 1

藤岡穰・関丙賛監修『日韓金銅半跏思惟像－科学的調査に基づく研究報告－』（監修・共著、韓国国立中央博物館、2017年12月）の論文より抜粋

京都市左京区八瀬に位置する妙傳寺(みょうでんじ)は、元和2年(1616)の開創と伝えられる天台寺院である。八瀬は比叡山の西の谷間にあり、住人は古くから比叡山諸寺の雑役や比叡山に登る駕籠かきに従事していたと言われ、室町時代以降は朝廷に出仕して天皇の行幸や葬送の際に輿を担ぐ仕事に就くようになり、八瀬童子とも称されてきた。そうした歴史をもつ八瀬には、重要文化財の指定を受ける十一面観音をはじめ、平安時代や鎌倉時代にさかのぼる多くの古仏が伝わってきた。

妙傳寺本尊の金銅製の半跏思惟像は、総高50.4cm、坐高36.7cmを測る。江戸時代の厨子内に安置され、如意輪観音菩薩として伝えられてきた。妙傳寺が大正7年(1918)に本山比叡山延暦寺に提出した『寺院所有物明細帳』控の冒頭に次のように記されているのが本像に関する唯一の記録である。

坐像 丈壹尺五寸 厨子入

本尊如意輪観世音菩薩 銅像壹軀

由緒未詳

本像は金銅仏としては比較的大きな像であるが、細部まできわめて精緻に作られている。そして、その着衣や装身具のデザインに注目すると、本像にはやや古様な、中国の南北朝時代や百済の作例に通じる特徴が認められる一方で、隋～初唐ないし新羅の仏像に共通するデザインが採りいれられている。

そのうち古様な特徴として挙げられるのは、第一に、宝冠正面に表された化仏の手が大きく、指先が顎にまで達する点である。2009年に南京市新街口で発見された梁(6世紀前半)の金銅仏(南京市博物館、六朝博物館蔵)や山東省の諸城市林家村鎮出土の仏三尊像(諸城市博物館蔵)、曲阜・勝果寺址出土の天保7年(556)銘仏三尊像(山東省博物館蔵)など北魏～北斉(6世紀)の金銅仏、さらには扶蘇山城出土の鄭智遠造像など百済(6～7世紀)の金銅仏に類例があり、日本伝来の渡来仏と目される那智経塚出土の光背断片、法隆寺献納宝物143号像光背の化仏がより近似する。また、正面の頭髮に水平に毛筋を刻む点は百済製とみられる新潟・関山神社菩薩像や長野・観松院菩薩半跏像に共通し、観松院像とは両肩にかかる垂髪の間も近似する。さらに、脚部中央のとぐろを巻く龍文飾りが百済系の作例とみられる千葉・金鈴塚古墳出土の単龍式環頭太刀の龍文に近似することが指摘される。

一方、隋～初唐ないし新羅の仏像に共通するのは以下の要素である。まず、頭上にパルメット形の光焰を発する宝珠をいただくのは、大英博物館の隋の作例とされる金銅菩薩立像に近似する。宝冠正面の化仏の周囲を連珠文で縁取る点については、山東省青州市駝山

石窟第2窟の観音菩薩像に、化仏の立坐の体勢には違いはあるものの共通している。宝冠の左右に宝冠をとめる紐をくわえる獅子頭を表しているのも珍しいが、ハーバード大学サックラー美術館のやはり隋とされる石造菩薩像が類例として挙げられる。また、上半身には左肩から帯で吊るワンショルダーでノースリーブの衣を着けるが、これも隋に多く見いだせる着衣で、敦煌莫高窟244窟の塑造菩薩立像、同じく314窟の壁画半跏思惟像、堺市博物館の代用檀像の菩薩立像などに認められ、さらに新羅の作とみられる慶北亀尾善山邑出土の韓国国宝183号観音菩薩立像(国立大邱博物館蔵)も同様の衣を着けている。また、たいへん細かな部分ながら、耳朶に切れ込みを表すのも特異であるが、これはインド・ Gupta朝(5世紀頃)の彫像に淵源があり、唐時代初期の造営とみられる四川省広元皇沢寺第28窟の仏三尊像、さらには初唐の図像に基づく法隆寺金堂壁画中の仏像などに類例がある。なお、妙傳寺像の胸飾中央から垂れる瓔珞には大鈴に小鈴が付く分子構造のような鈴飾りが表わされる。こうした鈴飾りは北周の四川省綿陽碧水寺観音菩薩像やそれと近似する東京藝術大学の金銅菩薩像など南北朝末期から見出されるものの、陝西省西安市北郊漢城郷西査村出土の大理石製菩薩像、ミネアポリス美術館の菩薩像、四川省広元市皇沢寺第28窟の観音菩薩像など、むしろ隋から初唐にかけての作例に多く採用されている。

さて、妙傳寺像には南北朝ないし百済の仏像に通じる部分と、隋～初唐ないし新羅の仏像に通じる部分があるが、このように複数の時代、地域の特徴が混在していることについては果たしてどのように理解するべきであろうか。第一に、先進的あるいは初発的な作例であれば恐らくこのような現象は生じ得ず、むしろそうした先進的な作例の影響を受けて成立したとみるべきであろう。また、複数の異なる様式が混在する場合、後世における模古作あるいは贋作である可能性も吟味しなければならないが、妙傳寺像の場合、その存在は大正7年には確認されており、かつ上述のような細部形式についてはごく近年の仏像研究のなかで時代性や地域性が認識されるようになったものであることから、大正7年以前の時点で贋作として作られたとは到底考えられない。そして、その制作年代については、たとえ古様が認められるとしても、基本的には最も新しい特徴によって判断するべきであり、妙傳寺像の場合は初唐、もしくはその影響を受けた新羅の作とみるのがセオリーになっていると思われる。

ただし、妙傳寺像の場合、鉛の含有量が少ないという青銅の組成からは中国製というよりは朝鮮半島製の可能性が高いと考えられる。そうした青銅の組成の問題を踏まえて考えるならば、隋～初唐において南北朝期の古様を残して制作されたとみるよりも、朝鮮半島において古様を継承しながら、新たに隋～初唐様式を受容して制作されたとみる方が、像容のうえでも理解しやすいだろう。

妙傳寺像の場合、頭髪や化仏の形式が百済の作例に一致することなどから百済の作とみるべきとの意見もあるだろう。確かに百済か新羅かの判断は難しいところである。しかしながら、ワンショルダーの衣が三国の出土地が明らかな作例では慶北亀尾善山邑出土の国宝183号観音菩薩像にのみみられること、繊細な瓔珞の表現についても同邑出土の国宝

184号観音菩薩像（国立大邱博物館蔵）が最も近いことは看過できない。まるで唐製檀像を写したかのような国宝184号像の瓔珞は精緻かつ立体的で、妙傳寺像のそれをさらに押し進めた感があると言えよう。

なお、妙傳寺像については、韓国国宝78号半跏思惟像（国立中央博物館蔵）と意外によく類似していることを指摘しておきたい。やや面長や顔立ちやプロポーション、台座にかかる衣の前面と側面をいずれも平板に表わす点やその衣褶構成、細部で言えば宝冠両端にパールメット形の飾りを表わす点、右頬に添える思惟手の第4、5指を折る点などを類似点としてあげることができる。国宝78号像が三国いずれの制作になるのかについては意見の分かれるところであるが、慶北安東市で発見されたとの伝承があることは興味深い。もし、その伝承を信じることができるならば、妙傳寺像、そして国宝183号、184号像とともに、あるいは慶北地方における造像の系譜を想定することができるのかも知れない。